

青森県埋蔵文化財調査報告書 第208集

# 桜ヶ峰（2）遺跡

国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告

1997

青森県教育委員会











## 例 言

- 1 本報告書は、平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業に係る桜ヶ峰(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の青森県遺跡登録番号は05059である。
- 3 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に記してある。
- 4 石質鑑定・地形及び地質については、青森県埋蔵文化財調査センターの伊藤昭雄が行なった。
- 5 本報告書に掲載した遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図(浪岡・大釈迦)に基づき作成したものである。
- 6 挿図の縮尺は、図ごとに示した。尚、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 7 土層の注記は、『新版標準土色帖』(小山・竹原;1979)を参照した。
- 8 各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。
- 9 引用・参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。
- 10 出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

### スクリーン・トーン凡例

#### <遺構実測図>



地山



火山灰



炭化物

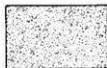


道跡(硬化面)



(焼土)

#### <遺物実測図>



スリ



タタキ・クボミ



火を受けた痕

- 12 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、下記の方々から御協力・御助言を得た(順不同・敬称略)。

上野秀一、久保泰、山口義伸、鈴木徹、半沢紀、工藤清泰、本田泰貴















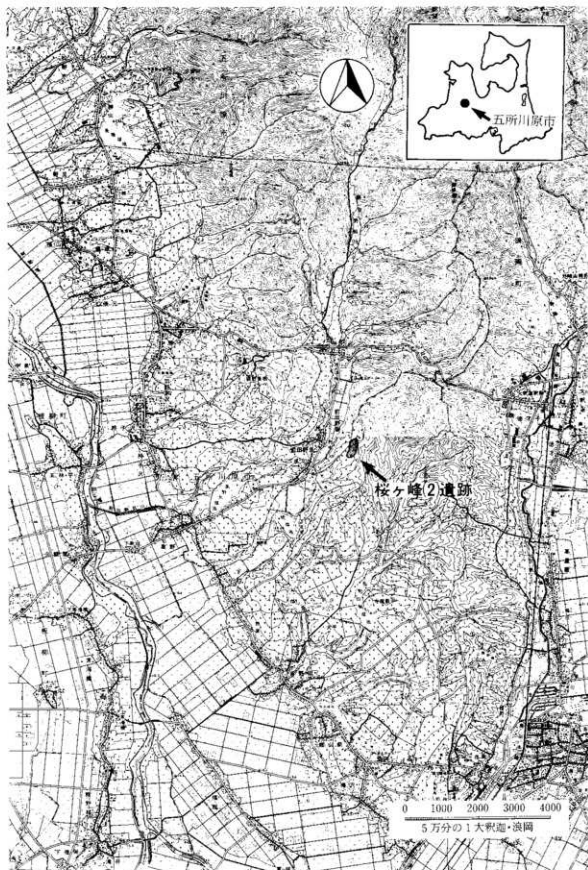


図1 桜ヶ峰(2)遺跡位置図

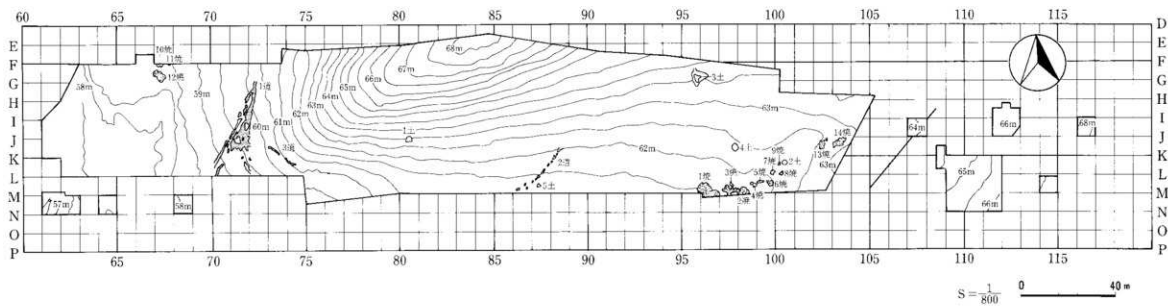
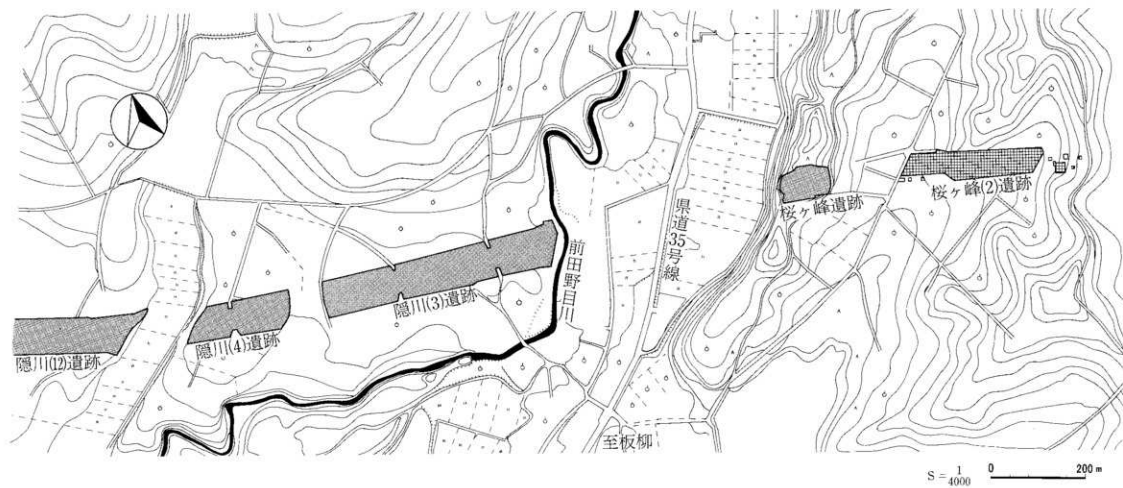


図2 遺跡周辺地形図及び遺構配置図





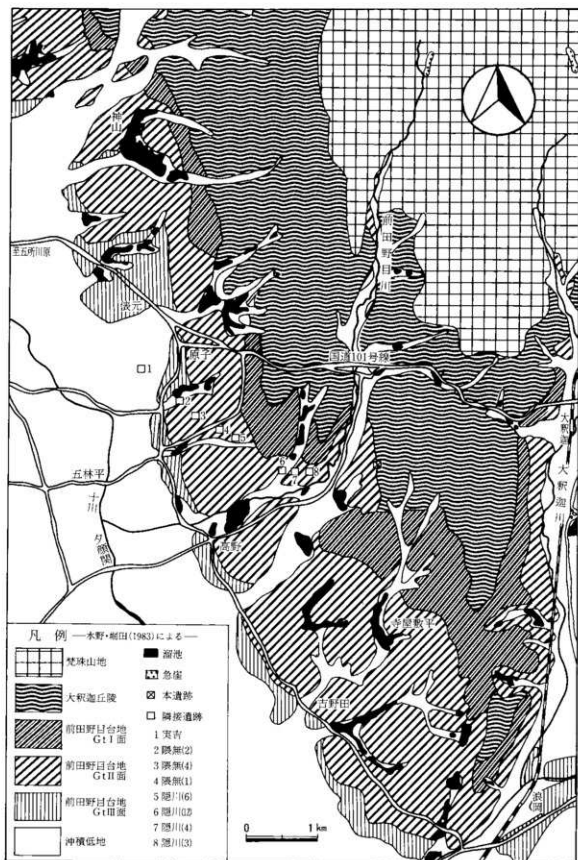


図3 五所川原市七和地域の地形分類図





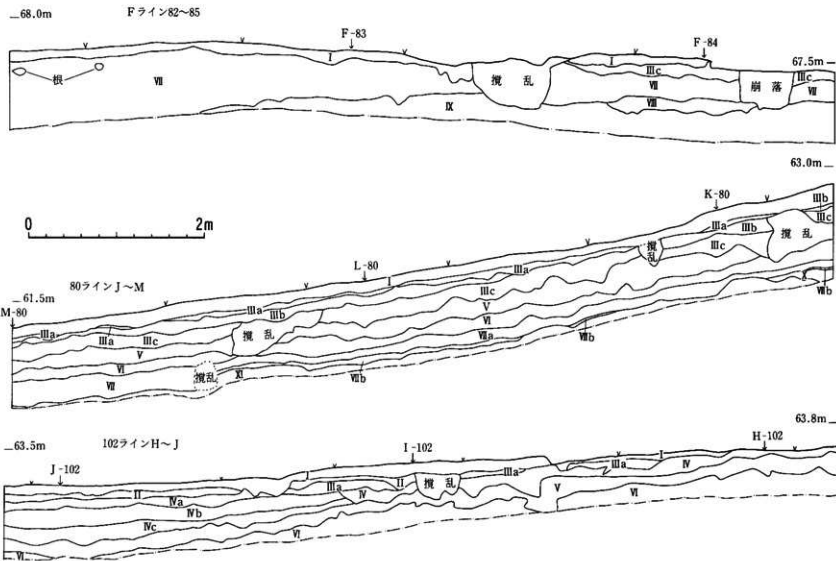
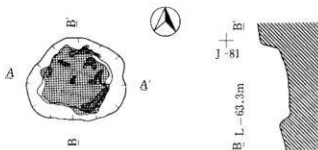


図4 桜ヶ峰の遺跡内土層実測図





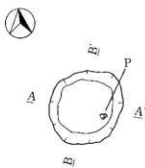


A L = 63.3m A'



**第1号土坑堆積土**

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 しまりあまり無し  
 第2層 白須山火山灰ブロック  
 第3層 10YR3/4 暗褐色土 しまりあまり無し

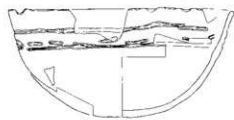


A L = 62.4m P A'

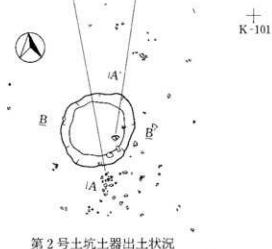


**第2号土坑堆積土**

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 しまり・湿性有  
 第2層 10YR2/1 黒色土 しまりやや有、粘性・湿性有  
 第3層 崩落土



0 5cm



第2号土坑土器出土状況

L 101

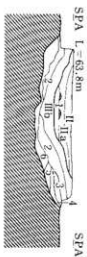
S =  $\frac{1}{50}$  0 2m

図5 第1号・第2号土坑



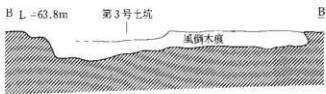


第3号土坑

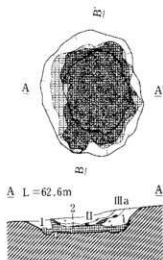


第3号土坑堆積土

第1層 黒褐色土 10YR3/2 III 6層土主体。炭化物を多量混入。  
2~6層 風倒木痕



第4号土坑



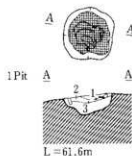
第4号土坑堆積土

第1層 黒褐色土 10YR2/2 しまり有。炭化物少量混入。IIIb層類似。  
第2層 黒色土 10YR2/1 しまり無。炭化物主体の層。床面が焼土化（明赤褐色土）。

第5号土坑

1-98

1-87



第5号土坑堆積土

第1層 黒色土 10YR1.7/1 しまりなし。炭化物を多量混入。  
第2層 黒泥土 10YR2/1 しまりなし。炭化物を多量混入。  
第3層 褐色土 10YR4/4 しまりなし。IIIc層と類似。

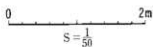


図6 第3号・第4号土坑

## 第2節 焼土状遺構

14基の焼土状遺構を検出した。規模等については下表に一覧表として載せた。

焼土状遺構一覧表

No.	位置	長軸×短軸×厚さ (cm)	平面形
1	L-96	448×246×16	不整形
2	L-97・98	590×207×16	不整形
3	L-97	112×66×6	不整形
4	L-98	164×91×11	不整形
5	L-99	176×60	不整形楕円
6	L-99	165×130×16	不整形
7	K-99	115×108×19	不整形
8	L-100	114×64×8	不整形楕円
9	K-100	131×72×24	不整形楕円
10	F-67	159×75×26	不整形
11	F-67	64×30×32	不整形
12	F-67	280×183×16	不整形
13	J-101	227×136×24	不整形
14	J-102	452×178×27	不整形

〔小結〕 焼土状遺構は、緩やかな谷地形の谷部分に並ぶように分布する。また、焼土状遺構が確認された土層は全てIV層（黒色土）の下位である。焼土の堆積状況は、中位に暗赤褐色土の層が形成され、その上下に、IV層の黒色土と混ざった極暗褐色土の層が水に流されたような状態で広く形成されていた。尚、焼土層からは遺物は検出されなかった。

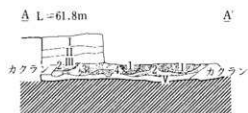
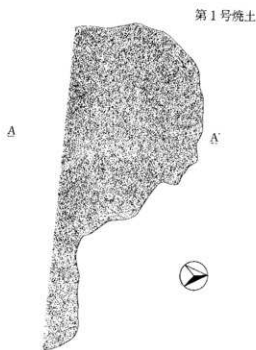
以上のような状況から、本遺跡における焼土状遺構は、何らかの理由で焼土化した土壤が水の影響を受けて二次堆積したものと考えられる。

（赤羽 真由美）

## 第3節 近代の道跡

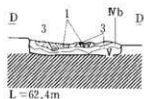
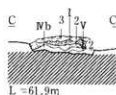
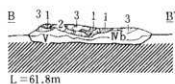
表土を排除した状態で、道路状の硬く踏みしまった範囲（以下、硬化面と表記する）を検出した。第2号及び第3号道跡では断続的な1条の硬化面を検出した。硬化面の最大幅は約50cm、最小幅は約20cmである。また、第2号道跡の全長は11.4m、第3号道跡の全長は7mである。第1号道跡に比べると硬化が緩く、あぜ道状である。第1号道跡は轍を形成しており、J-71グリッド付近で二又に分かれる。一方は調査区東側の農道方面へ、もう一方は第3号道跡方面へ向かうものと思われる。硬化面の最大幅は分岐点で約3.1m、最小幅は20cmある。硬化面上には蹄鉄が残されていた。第1号道跡では、等間隔の硬化面が2条走っていることから、馬に荷車を引かせて通行した道の跡とも考えられる。蹄鉄が一般に普及するのは明治時代以降なので、少なくともそれ以降の時期が想定される。

（赤羽 真由美）



第1号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR3/6 黒褐色土との混合土。  
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土との混合土。  
 第3層 黒褐色土 10YR2/2 極暗赤褐色土との混合土。  
 第4層 明赤褐色土 5 YR5/8 黒褐色土との混合土。

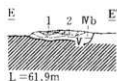


第2号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR3/4 黒色土との混合土。しまり有。  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土との混合土。  
 第3層 暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。

+

L-98



第5号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土との混合土。

S =  $\frac{1}{50}$  0 2m

図7 第1号～第3号焼土

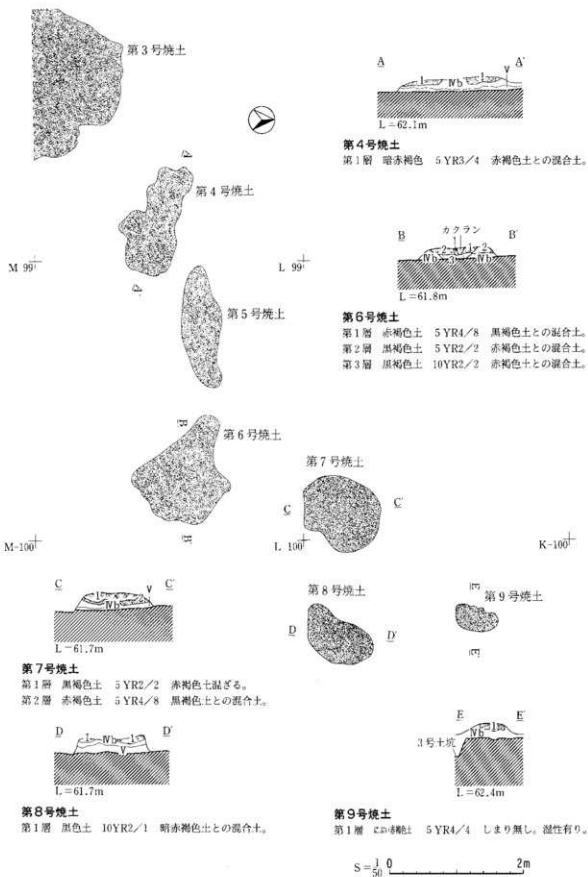
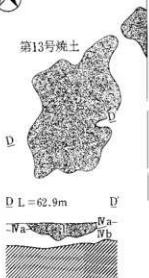


図8 第4号～第9号焼土

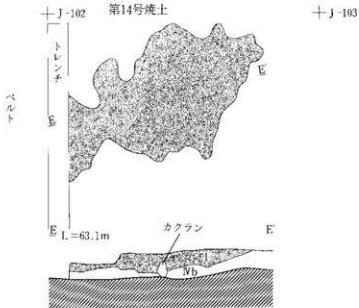
+



第13号焼土



第14号焼土



+ J-103

## 第13号焼土

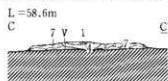
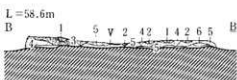
第1層 黒色土 7.5YR1.7/1 赤褐色土 (5 YR4/6) との混合土。

## 第14号焼土

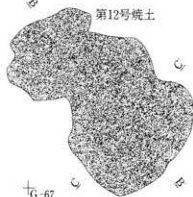
第1層 黒色土 7.5YR1.7/1 赤褐色土 (5 YR4/6) との混合土。

第10号焼土

第11号焼土



第12号焼土

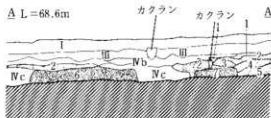


## 第12号焼土

- 第1層 暗赤褐色土 5 YR3/6 暗赤褐色土と黒褐色土との混合土。
- 第2層 黒褐色土 5 YR2/2 暗赤褐色土との混合土。
- 第3層 暗赤褐色土 5 YR2/4 暗赤褐色土との混合土。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。
- 第5層 黒褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。
- 第6層 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土・暗赤褐色土との混合土。
- 第7層 黒色土 10YR1.7/1 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。

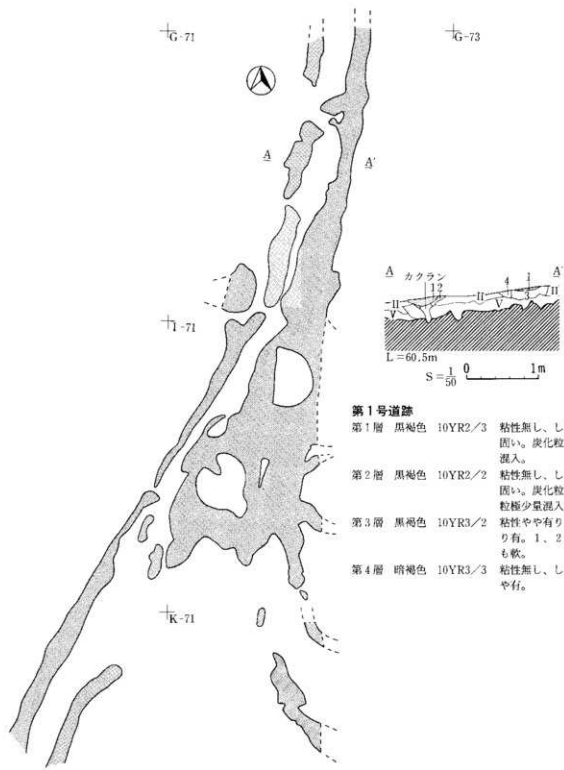
## 第10・第11号焼土

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗赤褐色土 5 YR2/3 暗赤褐色土との混合土。
- 第3層 暗褐色土 10YR2/2
- 第4層 暗褐色土 10YR2/3 暗赤褐色土との混合土。炭化材少量混入。
- 第5層 暗褐色土 10YR2/2 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。
- 第6層 暗赤褐色土 5 YR2/3 赤褐色土との混合土。しより有。
- 第7層 暗褐色土 5 YR2/2 暗赤褐色土・黄褐色土との混合土。



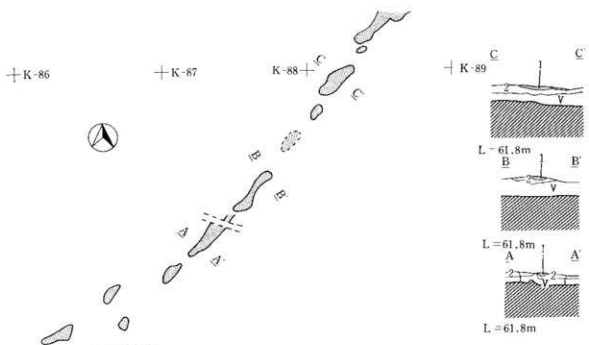
S =  $\frac{1}{50}$  0 2m

図9 第10号～第14号焼土



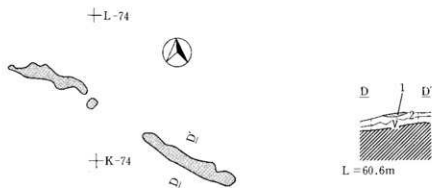
- 第1号道跡**
- |     |     |         |                           |
|-----|-----|---------|---------------------------|
| 第1層 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 粘性無し、しまって固い。炭化粒極少量混入。     |
| 第2層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 粘性無し、しまって固い。炭化粒、焼土粒極少量混入。 |
| 第3層 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 粘性やや有り、しまり有り。1、2層よりも軟。    |
| 第4層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 粘性無し、しまりやや有。              |

図10 第1号道跡



**第2号道跡**

第1層 黒褐色土 10YR3/2 粘性なし。しまって固い。砂分を含む。  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 粘性なし。しまりあり。III b層主体の風成層。道跡下部部分は固い。



**第3号道跡**

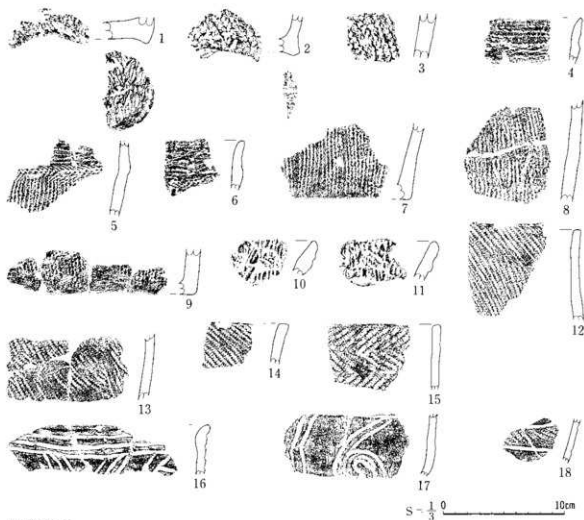
第1層 黒褐色 10YR2/3 粘性無し。しまって固い。  
 第2層 暗褐色 10YR3/3 粘性無し。しまりやや有。III層主体の風成層。



図11 第2号・第3号道跡



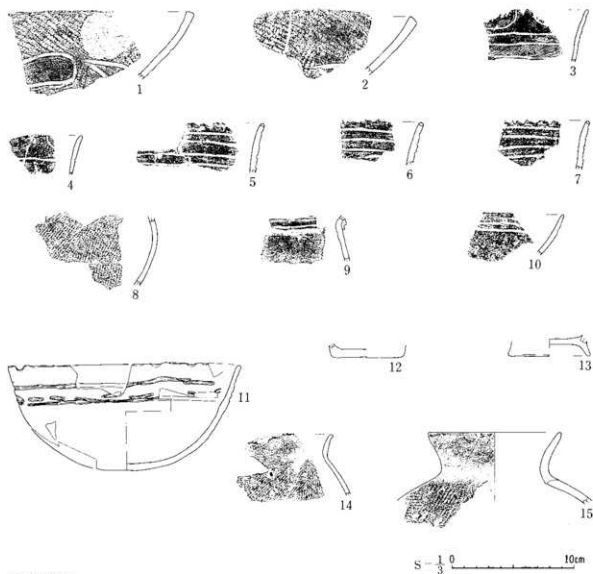




土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
12-1	H-83	III	深鉢	底部	底部RL?	繊維混入	I
2	I-90	III	深鉢	底部	胴部RLR(ヨコ)、底部RLR	繊維混入	I
3	G-83	III	深鉢	胴部	RLR(ヨコ)	繊維混入、1と同一個体	I
4	I-112	III	深鉢	口縁部	L側面圧痕		I
5	F-66	III	深鉢	口縁部	L側面圧痕、LR/RL羽状織文(結束第一種)、L燃糸文		I
6	F-66	III	深鉢	口縁部	L側面圧痕、LR/RL羽状織文(結束第一種)		I
7	H-65	III	深鉢	底部	LR燃糸文	海綿骨針含	I
8	H-65	III	深鉢	胴部	L燃糸文?	海綿骨針含	I
9	H-65	III	深鉢	底部	L燃糸文	海綿骨針含	I
10	I-112	III	深鉢	口縁部	LR→粘土貼付→L(0段多条)圧痕		II
11	I-112	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ)→粘土貼付→(0段多条)圧痕		II
12	G-69	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ・0段多条)	同一個体、海綿骨針含	III
13	G-69	III	深鉢	胴部	RL(ヨコ・0段多条)		III
14	G-69	III	深鉢	口縁部	RL(ヨコ・0段多条)		III
15	G 63	III	深鉢	口縁部	LR(ヨコ・0段多条)を羽状に施文	繊維混入	III
16	G-98	III	深鉢	口縁部	ミガキ→沈線文	海綿骨針含	III
17	G-98	III	深鉢	胴部	ミガキ→沈線文	海綿骨針含、16と同一個体	III
18	M 61	II	—	胴部	RL(ヨコ)0段多条→沈線文→擦消		III

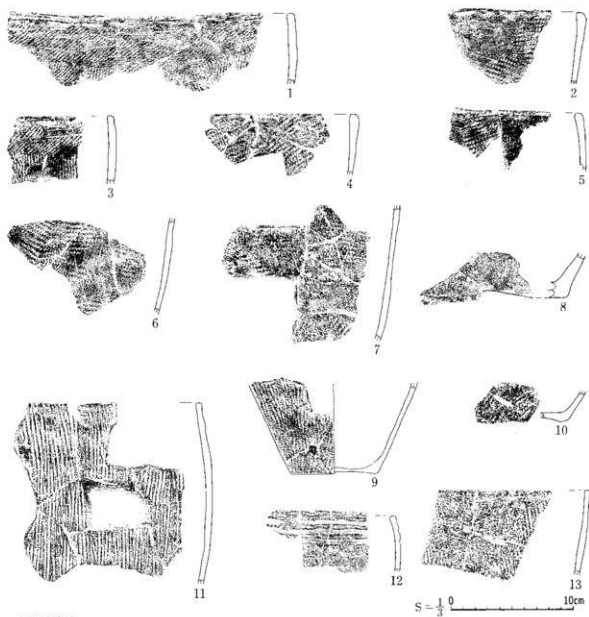
図12 遺構外の出土遺物(縄文土器その1)



土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
13-1	M-62	II	浅鉢	口縁部	RL (ヨコ) → 沈線文 → 擦消	海綿骨針合、内面ミガキ	III
2	G-68	II	浅鉢	口縁部	RL (ヨコ) → 沈線文	2-1と同一個体	III
3	J-70	V	台形鉢	口縁部	山形口縁、LR (ヨコ) → 沈線文 → 擦消	2-3と同一個体	IV
4	J-70	III	台形鉢	口縁部	山形口縁、沈線文 → ミガキ	2-3と同一個体	IV
5	G-93	IV	—	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
6	G-93	IV	—	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
7	G-93	IV	—	口縁部	小波状口縁、並行沈線 → ミガキ		IV
8	F-95	I	—	肩部	LR (ヨコ)	内面ミガキ	IV
9	K-100	IV	壺	口縁部	ミガキ、陸帯貼付け → 沈線	内面ミガキ	IV
10	K-100	IV	浅鉢	口縁部	LR (ヨコ?) 平行沈線	摩耗激しい	IV
11	K-100	IV	浅鉢	復元	平行沈線・押しきり列点 → ミガキ	2号土坑出土土器片と接合	IV
12	G-72	III	台形鉢	台部	無文		IV
13	I-62	II	—	底部	無文	海綿骨針合	IV?
14	G-91	III	煎製土	口縁部	口縁部無文、胴部LR (タテ・ヨコ)		V
15	H-71	I	煎製土	口縁部	口縁部無文、胴部LR (タテ・ヨコ)		V

図13 遺構外の出土遺物（縄文土器その2）



土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文様特徴	備考	分類
14-1	L-110	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→RL(ヨコ)、L(タテ)		V
2	L-110	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR(ヨコ)、L(タテ)		V
3	H-70	I	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR縦走(0段多象)		V
4	H-71	III	深鉢	口縁部	LR(ヨコ)		V
5	H-71	III	深鉢	口縁部	口唇部粘土貼付→LR(ヨコ)	スス状炭化物付着	V
6	H-70	I	深鉢	胴部	LR(タテ)	スス状炭化物付着	V
7	H-70	I	深鉢	胴部	LR(タテ)	内外面にスス状炭化物付着	V
8	G-66	II	-	底部	無文		V
9	G-91	III	-	底部	RL縦走		V?
10	H-70	I	-	底部	胴部LR(ヨコ)、底部ナデ	底部上げ底気味	V
11	F-67	II	深鉢	口縁部	条痕文		V
12	F-74	III	深鉢	口縁部	条痕文→平行沈線		V
13	F-67	II	深鉢	口縁部	条痕文		V

図14 遺構外の出土遺物(縄文土器その3)

第VI群 弥生時代及び続縄文時代の土器 (図15、図16)

弥生土器 (図15: 1~19)

70片出土した。ほとんどが胴部の細片であり全く接合しない。口縁部は1点のみであり、底部は出土しなかった。個体数は、地文縄文および胎土・焼成の状態より察して1個体と考えられるが、18と19の2片のみは別個体の可能性も否定できない。ここでは、拓影図に耐えうる19点を抽出し、報告する。

器種は甕と思われる、頸部が直立し口径の広い器形であると思われる。文様は、縄文と沈線が確認できる。器厚は4~5mmである。

地文縄文は、単節RLを縦走させた後、短軸絡条体(無節L)による燃糸文(綾線状、矢羽状)を横位に施していると思われるが、確定できない(註)。縦走縄文の条間は2~3mm開き、その部分に縄文施文以前の横位調整(恐らくナデ)がかすかに観察される(9)。施文後の器面ミガキは認められない。

全体の文様構成は不明瞭であるが、一部に斜沈線(4・5)を組み合わせた数条の横走沈線(1~6)が見られる。沈線は縄文施文後に施されている。特に横走沈線は、口縁部直下から数cm下の頸部あたりのみ施されているようである。沈線幅は約1.5~2mm、断面形は半円形で、深浅もなく均等である。

縄文は、数段巡らされる横走沈線の間にも若干観察できる(2~6)ものの、口縁部直下には施されていないようである(1)。ただし、口唇部にはかすかに施されている。胴部以下は、縄文のみの文様と想像され、沈線は一切確認されない。胎土には石英粒を主とする砂粒が全体的に含まれている。付着物としては、煤状炭化物が外面の胴部に認められる程度であり、他には認められない。色調は、灰白色~褐色を呈し、バラエティに富むが、灰白色の破片は風化によって退色したものと考えられる。

以上の諸特徴より、これらは、时期的に燃糸文を施す弥生中後葉~後期頃のもの と推察されるが、断定はできない。なお、交互刺突文が施される土器は出土していない。(木村 高)

(註)縦走縄文の節はあまり傾いておらず、一般的に「単節」と称するものと同じであるため、絡条体による回転施文の可能性は低いと考えられる。また、絡条体を用いて綾線状・矢羽状の燃糸文のみを施すのは不自然に思えるが、①縦走縄文と燃糸文が垂直に交わる。②縦走縄文を燃糸文が切る。③燃糸文の節がかなり斜めに傾く。の3点より、両者は同時施文ではないと判断した。

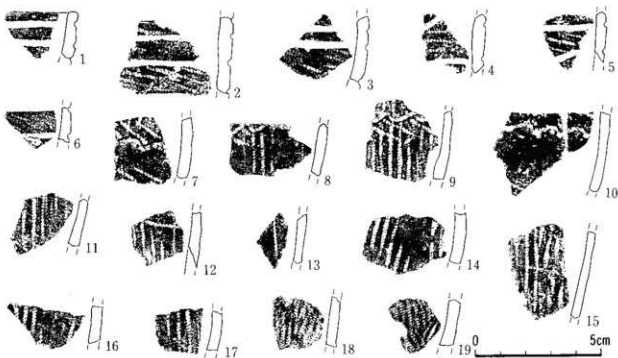


図15 遺構外の出土遺物(弥生土器)

### 続縄文土器 (図16:1)

調査区西側の平地地より1片だけ出土した。深鉢形土器の体部上半と思われる。RL帯縄文の上に2本単位の微隆起線を貼り付けたものである。胎土は1mm以下の砂粒を含むが良好である。器厚は約6mmで、硬く焼きしめられており、外面は暗褐色、内面にはぶい褐色を呈す。帯縄文は2本の縞状に施文されている。2本単位の微隆起線はヘリをこすってなでつけられており、断面形は三角形になっている。2本単位の微隆起線は北海道の続縄文時代の後北C1式の特徴である。微隆起線のモチーフも、札幌市K135遺跡の後北C1式土器に見られるような亀甲形になりそうである。しかし、後北C1式土器には、2本単位の微隆起線によって区切られた中に、1条及び2条の三角状刺突を施すものがほとんどであり、本例の様に帯縄文を施すのは、次の後北C2-D式に移行してからである。また、器厚・焼成も北海道におけるC1式土器のものより薄手で良好のようである。小片のため判然としないが、後北C1式の最終末からC2-D式の最古段階に位置づけられると思われる。尚、新潟県の打越遺跡、北海道の聖山遺跡のKⅡ群土器(1979、七飯町教育委員会)に類例が見られる。(赤羽 真由美)

### 第Ⅶ群 土師器・須恵器 (図16:2~4)

土師器が2片、須恵器が5片出土したのみである。いずれも細片であるため、須恵器2片と土師器1片のみ図示した。2は須恵器の大甕の胴部である。表面にはタタキメがあり、色調は灰色を呈す。3は内外面とも自然釉がかかって光沢を帯びている。表面にはタタキメ、内面にはあて具痕がある。色調は黒色を呈す。4は、土師器の坏の底部である。胎土は砂粒を含むが良好で、色調はにぶい黄褐色である。器の内外面にはナデ調整が施されており、底部は上げ底気味である。(赤羽 真由美)

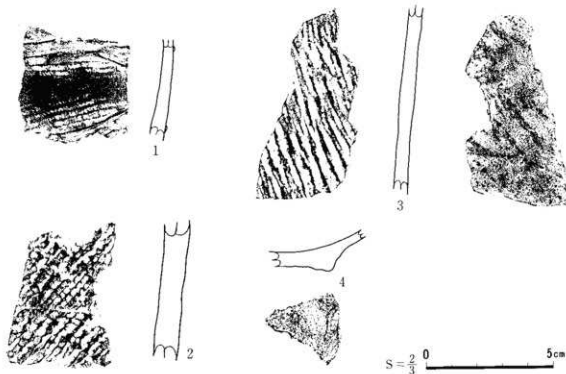


図16 遺構外の出土遺物(続縄文土器・土師器・須恵器)

土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器形	部位	文 様 特 徴	備 考
15-1	E-65	耕作土	甕	口縁部	口唇部に縄文 横走沈線 3 条	
2	E-65	-	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 4 条	
3	E-76	耕作土	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 3 条	
4	E-65	-	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 1 条 斜位沈線 1 条	
5	E-65	-	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 1 条 斜位沈線 1 条	
6	E-64	III	甕	頸部	RL縄文→横走沈線 2 条	
7	E-65	耕作土	甕	胸部	RL縄文 (縦位と斜位) 綾線 1 条	
8	E-65	-	甕	胸部	RL縄文→綾線 1 条	内面横ナデ
9	E-65	耕作土	甕	頸部	RL縄文→綾線 1 条 (矢羽状)	
10	E-64	III	甕	胸部	RL縄文→綾線 1 条	
11	E-65	III	甕	底部附近?	RL縄文	内面横ナデ
12	E-65	III	甕	胸部	RL縄文	
13	-	-	甕	底部附近?	RL縄文	
14	F-65	II	甕	胸部	RL縄文	内面横ナデ
15	E-65	-	甕	胸部	RL縄文	
16	E-65	-	甕	胸部	RL縄文	内面横ナデ
17	E-65	耕作土	甕	胸部	RL縄文	
18	G-96	-	甕	胸部	RL縄文	縄文の節が小さい
19	E-65	III	甕	胸部	RL縄文	縄文の節が小さい
16-1	I-61	I	深鉢	胸部	RL帯縄文→微隆起線貼付	砂粒含む 焼成良
2	I-70	III	大鉢	胸部	須恵器 タタキメ	
3	-	-	-	胸部	須恵器 タタキメ	
4	G-91	III	杯	底部	土師器 上げ底	海骨針混入 内面ナデ

## 第2節 石器ほか

### (1) 縄文時代の石器 (図17~19)

本遺跡から出土した縄文時代の石器は26点であり、調査面積と比べてそれほど多くはない。器種としては石鏃・石槍・尖頭器・石匙・不定形石器・石核・磨製石斧・敲磨器・片刃の礫石器等が見られる。これらはすべて、遺構外からの出土である。

石鏃 (図17; 1~4) は4点出土している。基部の形状は、1は有茎平基であり、2は有茎凸基、3は無茎尖基である。4は無茎平基であり、特に刃部に細かな調整がなされ、凹凸の激しい特殊な形状を呈する。いずれも石質は珪質頁岩である。

石槍 (図17; 5) は基部が折損した状態で1点出土している。石質は珪質頁岩である。

尖頭器 (図17; 6) は1点出土している。刃部は先端部から基部に至るまで両面とも細かな調整が施されている。石質は珪質頁岩である。

石匙 (図17; 7、8) は2点出土している。8は片面に火を受けており、先端部が折損している。7・8ともに片面のみの調整で縦型、石質は珪質頁岩である。

不定形石器 (図17; 9・図18; 1~6) は7点出土している。3はノッチの部分を調整した刃部が潰れた状態である。1・2・4・5はいわゆるU-フリイクの類いに分類される。石質は、珪質頁岩点、流紋岩1点である。

石核 (図19; 1) は1点出土しており、石質は珪質頁岩である。

磨製石斧 (図19; 2~5) は4点出土しており、どれも丁寧に研磨されているが、すべて折損品である。石質は、緑色細粒凝灰岩2点、花崗斑岩1点、ひん岩1点である。

敲磨器 (図19; 6~10) は5点出土している。内訳は、磨石2点 (6・7)、敲石1点 (10)、凹石1点 (8)、片面に剥離を集中して加え、刃部を形成している。石質は流紋岩である。 (相澤 治)

石器計測表

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	備考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)		
図17-1	H-66	I	石鏃	(35)	13	4	1.6	珪質頁岩	先端部折損
-2	J-100	VI	石鏃	(50)	14.5	5	2.7	珪質頁岩	先端部折損
-3	L-87	I	石鏃	(50.5)	16	4.5	3.0	珪質頁岩	先端部折損
-4	K-66	II	石鏃	24	21	3	0.9	珪質頁岩	
-5	F-82	I	石槍	43	21	10	10.4	珪質頁岩	基部折損
-6	J-87	V	尖頭器	90	13	7.5	8.1	珪質頁岩	
-7	I-63	I	石匙	65	31	9.5	17.9	珪質頁岩	
-8	H-82	I	石匙	(47)	39	8	10.8	珪質頁岩	折損品、火を受けている
-9	H-72	III	不定形	83	30	16.5	59.1	珪質頁岩	
図18-1	J-61	I	不定形	55	45	11.5	16.1	流紋岩	U-フリイク
-2	J-69	III	不定形	47	30	9	10.0	珪質頁岩	U-フリイク
-3	K-77	I	不定形	94	51	18	70.8	珪質頁岩	大きなノッチ有
-4	H-62	-	不定形	33	37	8	8.6	珪質頁岩	U-フリイク
-5	J-62	-	不定形	36	31	7.5	7.9	珪質頁岩	U-フリイク
-6	I-62	I	不定形	47	25	6.5	8.1	珪質頁岩	

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	備考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)		
図19-1	I-97	I	石核	141	111	63	921.3	珪質頁岩	
-2	F-72	III	磨斧	(32)	(26.5)	(19)	12.3	凝灰岩	刃部の一部
-3	H-63	I	磨斧	(37)	(31)	(11)	14.5	凝灰岩	基部の一部
-4	L-82	IV	磨斧	(61)	(37)	(28)	102.0	花崗斑岩	基部のみの折損品
-5	L-97	IV	磨斧	(65)	(40)	(27)	110.7	岩	基部のみの折損品
6	K-62	I	敲磨器	70	69	19	95.8	凝灰岩	磨石
-7	I-29	—	敲磨器	78	40	40	145.7	流紋岩	磨石
-8	I-62	—	敲磨器	82	41	45	130.2	凝灰岩	凹石、折損品
-9	K-39	—	敲磨器	(81)	100	(69)	502.3	凝灰岩	凹石+敲石、折損品
10	I-61	—	敲磨器	142	72	44	688.6	安山岩	敲石
-11	M-61	I	石の塊	151	76	48	580.7	流紋岩	

### (2) 陶磁器 (図20: 1~11)

本遺跡の遺構外より、デスクトレイで約半分ほどの陶磁器が出土している。時期的には中・近世から近代、現代に至るものまで見られる。近世のものとしては、肥前・唐津の陶磁器が主体であるが、出土した陶磁器の大半は近・現代のものである。また、大正から昭和のものと思われる碗の破片に鉛ガラス焼き接ぎの痕跡が認められる例が1点見られる。主な出土陶磁器の観察結果を以下の表にまとめたが、ここでは明治以前のものに限り観察の対象とした。また、観察表に記した年代観については大橋康二氏による肥前陶磁の年代区分(大橋1989)を基にした。(相澤 治)

陶磁器観察表

図版番号	出土地点	層位	産地	名称	器形	生産年代	特徴
図20-1	F-69	II	肥前	色絵	油壺	1690~1780	
-2	K-75	I	肥前	染付	瓶	1690~1780	外面網目文
-3	I-62	—	肥前系	染付	碗	1780~1860	
-4	K-64	I	肥前系?	染付	碗	1780~1860?	瀬戸産の可能性有
-5	F-65	I	唐津	陶器	壺	?	外面鉄塗
-6	F-69	II	唐津	陶器	播鉢	1630~1650	内外面無釉、内面卸目
-7	M-64	カワン	唐津	陶器	播鉢	1630~1650	内外面鉄釉、内面卸目
-8	H-98	I	唐津?	陶器	火入れ	18C?	外面白化粘土による刷毛目、透明釉
-9	I-62	I	在産系?	陶器	壺	?	外面鉄釉、白岩焼の壺の底部に似る
-10	J-61	II	?	陶器	焜鉢?	19C?	内外面無釉
-11	I-62	II	?	瓦質	播鉢	15~16C	

### (3) 銭貨 (図20: 12・13)

遺構外から、江戸時代に鋳造された寛永通寶が2点出土している。

12は、G-75グリッド第II層から出土しており、直径2.3cm、穿径0.6cm、外輪幅0.2cm、外輪厚0.15cm、重さ2.4gを計る。13は、I-16グリッド第I層から出土しており、直径2.3cm、穿径0.6cm、外輪幅0.2cm、外輪厚0.15cm、重さ2.9gである。「永」の字が辛うじて判別できたが、12よりかなり腐蝕が進んだ状態であった。(相澤 治)



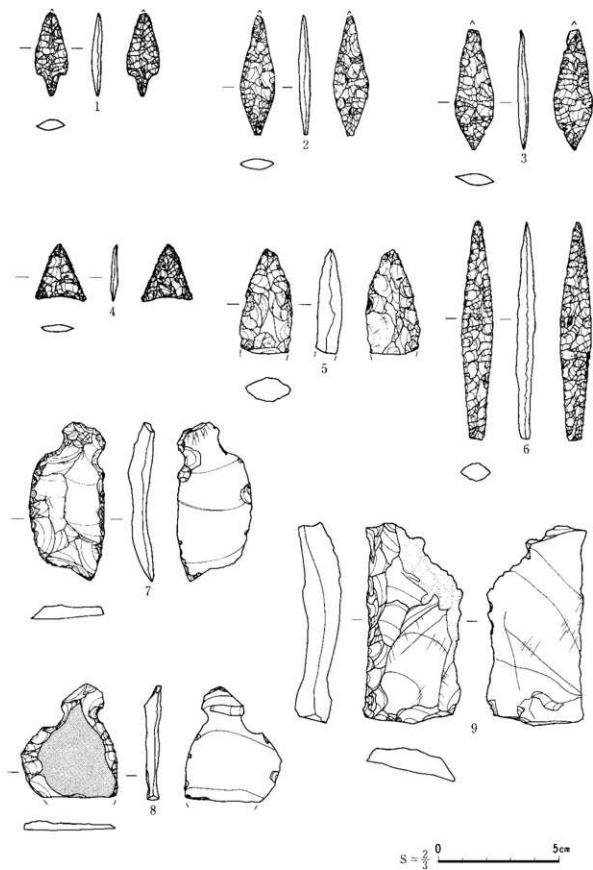


図17 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その1）

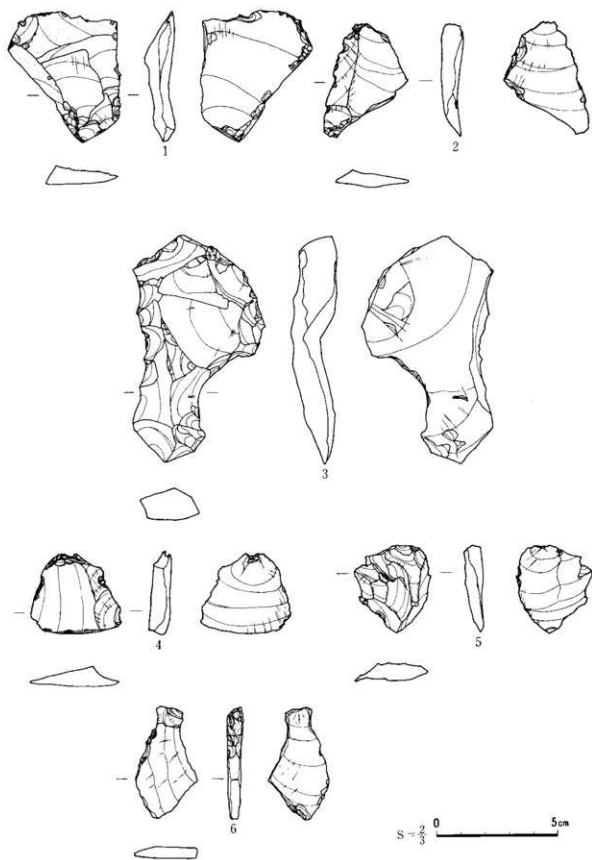


図18 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その2）

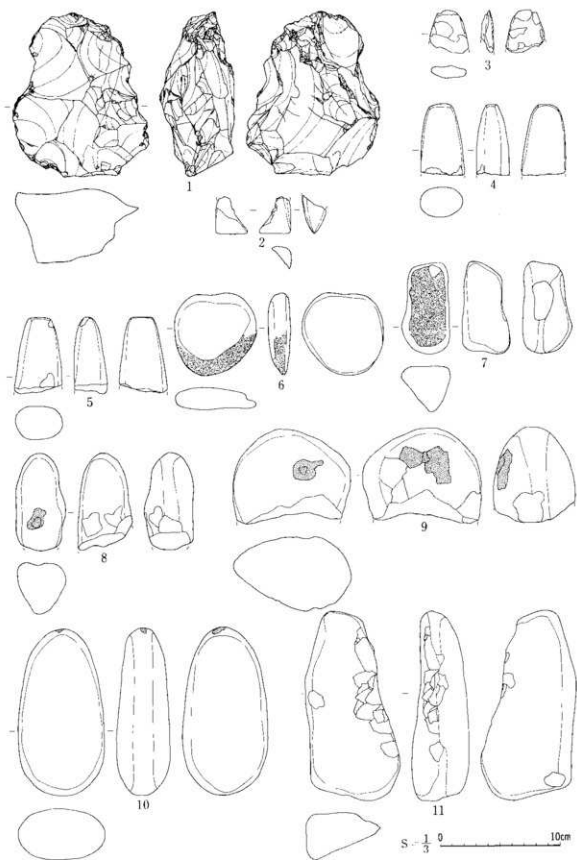


図19 遺構外の出土遺物（縄文時代の石器その3）

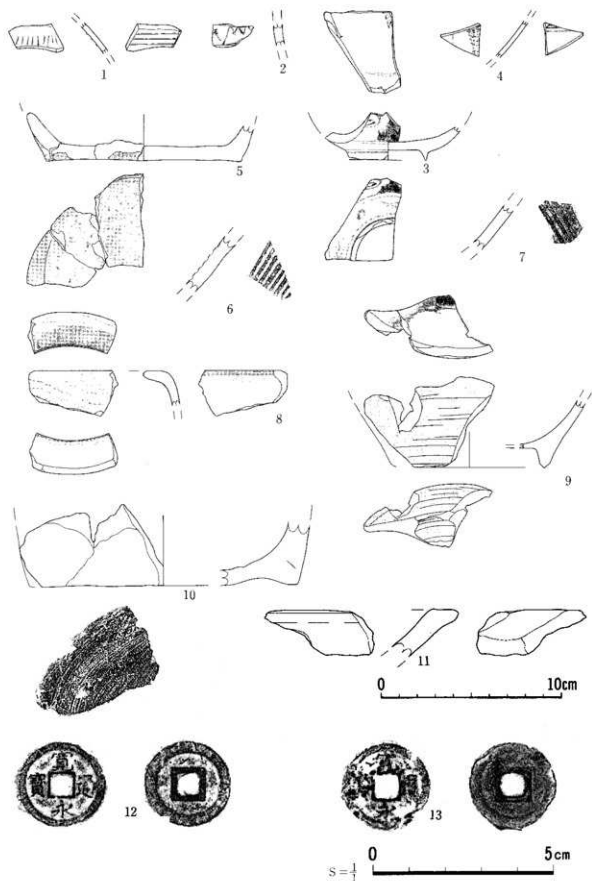


図20 遺構外の出土遺物（陶磁器・銭貨）





調査前風景  
(調査区中央より東を望む)



調査後風景  
(同上)



調査後風景  
(調査区中央より西を望む)

写真1 遺跡風景



Fライン F-81付近



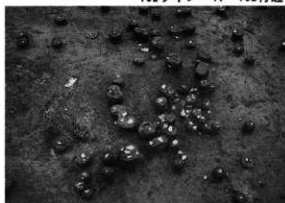
Fライン F-89付近



102ライン K-102付近



102ライン I-102付近



土器散布状況 (L-110グリッド付近)



土器散布状況 (H-70グリッド付近)

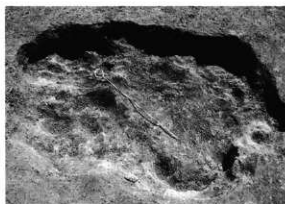


尖頭器出土状況

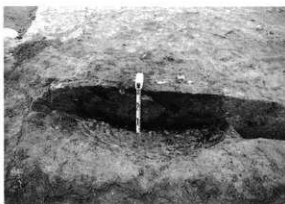


作業風景

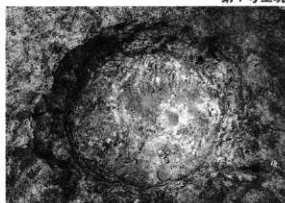
写真2 土層観察・遺物出土状況



第1号土坑



第1号土坑セクション



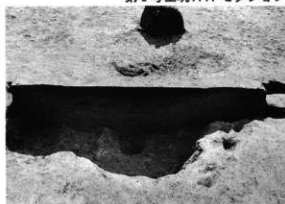
第2号土坑



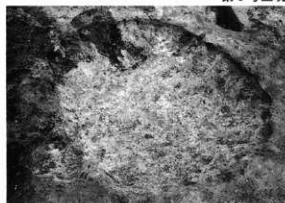
第2号土坑A A'セクション



第3号土坑



第3号土坑A A'セクション



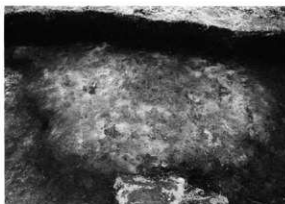
第4号土坑



第4号土坑セクション

写真3 第1号～第4号土坑

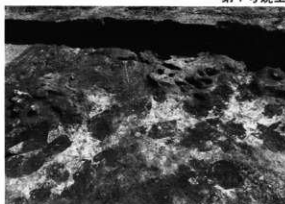




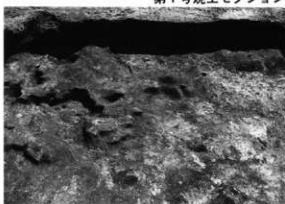
第1号焼土



第1号焼土セクション



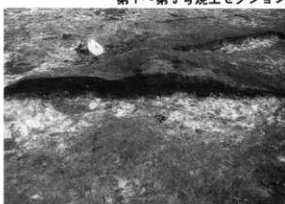
第2号～第4号焼土



第1～第3号焼土セクション



第3号焼土セクション



第4号焼土セクション

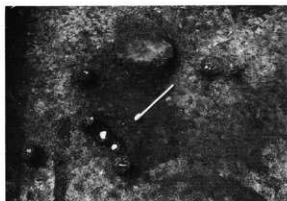


第6号焼土セクション



第7号焼土セクション

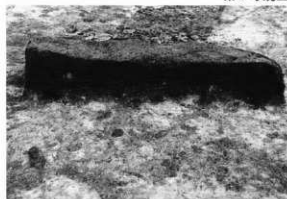
写真4 第1号～第4号・第6号・第7号焼土



第9号焼土



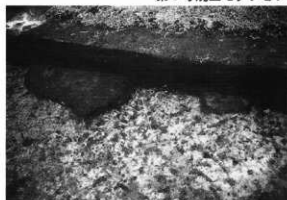
第9号焼土セクション (右隣は第2号土坑)



第8号焼土セクション



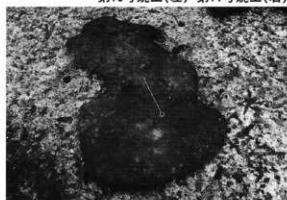
第2号焼土CC'セクション



第10号焼土(左)・第11号焼土(右)



第10号・第11号焼土セクション



第12号焼土



第12号焼土セクション

写真5 第8号～第12号焼土

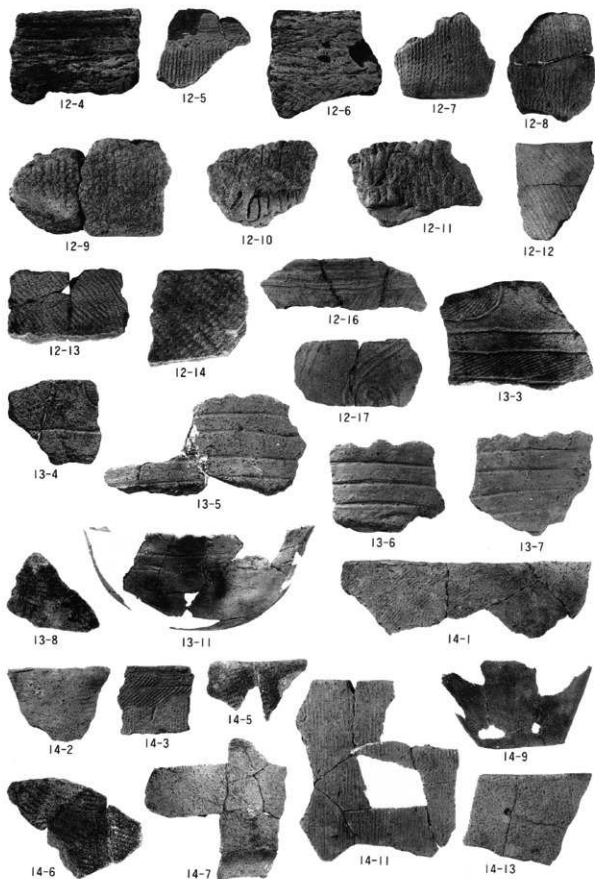


写真6 遺構外の出土遺物(土器)

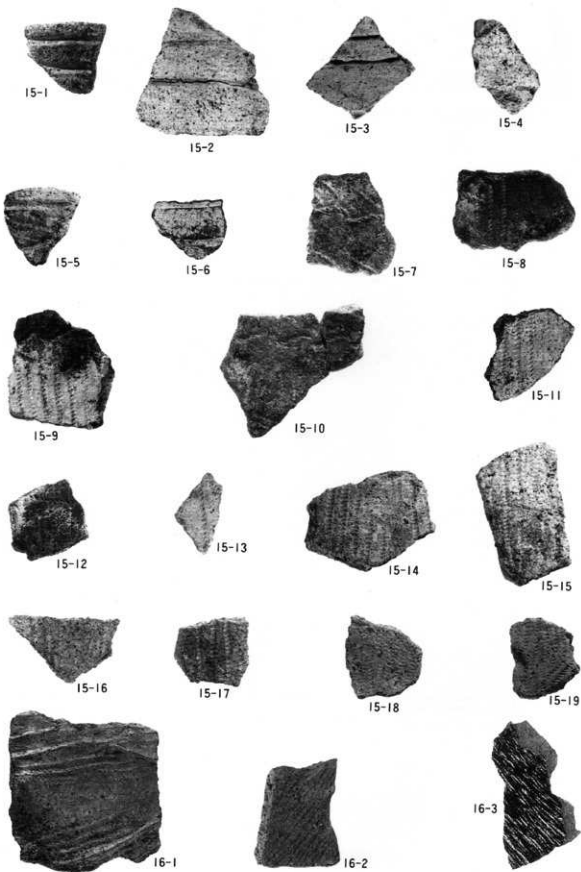


写真7 遺構外の出土遺物（土器）

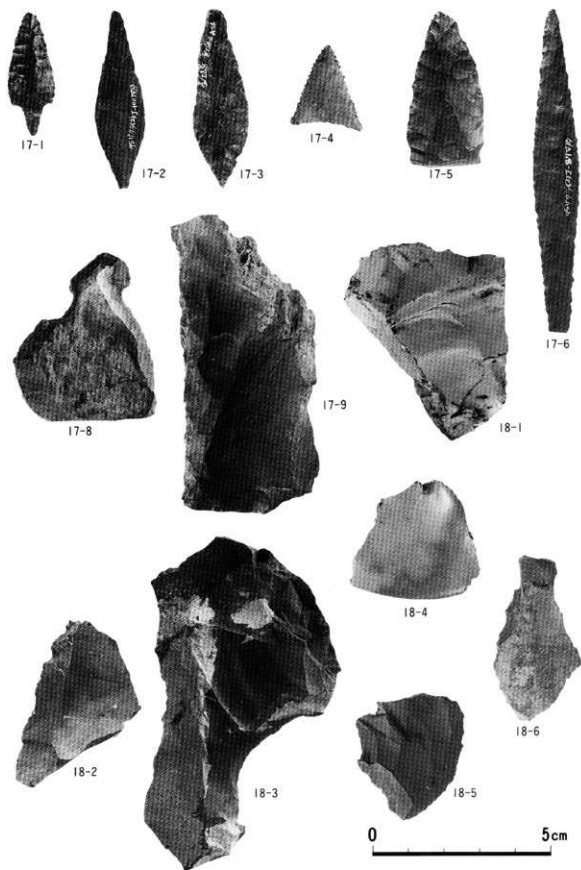


写真8 遺構外の出土遺物（石器）

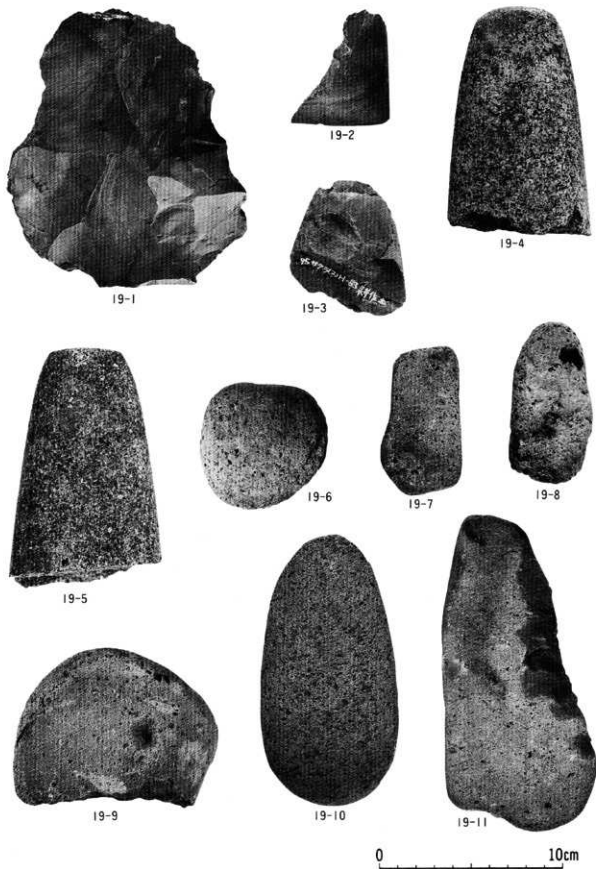
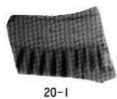


写真 9 遺構外の出土遺物（石器）



20-1



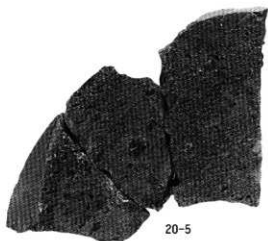
20-2



20-3



20-4



20-5



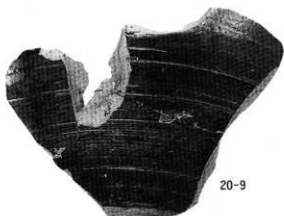
20-6



20-7



20-8



20-9



20-12



20-13



写真10 遺構外の出土遺物（陶磁器・銭貨）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	さくらがみね(2)いせき							
書名	桜ヶ峰(2)遺跡							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第208集							
編著者名	相澤 治、赤羽 真由美							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城字入田内152-15 TEL0177-88 5701							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さくらがみね(2)いせき 桜ヶ峰(2)遺跡	青森県 五所川原 市大字前 田野字 桜ヶ峰 86-9、外	市町村	遺跡番号	40度 44分 53秒	140度 33分 21秒	19950717 ～ 19951102	5200m <sup>2</sup>	国道101号 浪岡五所川 原道路建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
桜ヶ峰(2)遺跡	散布地	縄文時代	土坑1基?	土器：前期・中期・後期・晩期 石器				
		弥生時代	なし	土器：弥生時代後期				
		縄縄文時代	なし	土器：後北C <sub>1</sub> ～C <sub>2</sub> -D式 1片				
		平安時代	土坑3基	土師器・須恵器 微量				
		近代	道跡	なし				
		不明	焼土14基 土坑1基	なし なし				



